研究雑話(12)
内村鑑三が体験したアメリカ：セガンの「学校」から「コロニー」への転換点で(一八八五)
E・セガン以降、大事なことといくつか(三)

藤井　力夫

前回は、体温計の開発と臨床応用に障害児教育の創始者であるE・セガンやD・M・ブルネヴィルが深く関係していたことをお話しました。今回は、日本の近代化と障害児教育との出会いについて、内村鑑三の場合を例にお話したいと思います。内村はセガンの教育方法を体験した最初で最後の日本人ということにもよるのですが、無教会主義という独自のキリスト感を模索し「近代的自我」を追求した人物としての一つの大きな契機が、アメリカでの障害児施設での実践にあったように思えるからです。日本の近代化の出発点での歴史の一コマとしてたいへん興味深い。

①どのような障害児教育を体験したのか。

②何が大事でどんな勉強をしようとしたのか。

内村の初期略年譜は表Bに示した。札幌農学校卒業後なぜ開拓使(札幌県)御用掛を辞め、渡米するようになったかは、内村に関する本を読んでいただきたい。水産、漁業学を修め、博物、自然研究の「善用」を考え、北海道各地を踏査する内村と、まわりの官僚とのギャップ、堕落に耐えられなかったこと。結婚、破婚、その他。いずれにしても農学校時代に受洗した内村にとってキリスト教の栄える国がどのようなものなのか体験せずにはおれなかったのであった。アメリカに着いた内村は大学入学までの八ケ月間、知能障害児学校で指導員としての職を得ることができた。それはE・セガンも一時校長を努めたとされるペンシルヴァニア校。偶然であるがそれなりの必然があるのである。一八八五年のアメリカは不景気のただ中。職はなかなか見つからない。他方、知能障害児学校は大きな移行期。「救貧から防貧」への時代に入り、大規模収容施設(コロニー)へと変質。ペンシルヴァニア校の校長I・N・カーリンはその先頭をきっていた。一八七〇年、一九〇名の定員が一八八四年三八〇名、一八八五年五百名になっていたのであった(さらに一八九五年頃には千名規模になる)＞内村は二二名の子どもたち、最重度の子どもたちを担当、悪戦苦闘の毎日。この間の事情については『流竄録』(内村鑑三全集3、岩波書店)を参照されたい。

しかし、実際の指導は表Cにあるようにまさにセガンの生理学的教育方法であった。セガンの方法は地域での生活が意識されているから、実践そのものはコロニーのなかではやがて廃れて行く。それゆえ後に石井亮一が渡米した時、表中Aのコネチカットの学校に滞在するが(一八九六)、実践よりも図書館で勉強する方が多かったという。

内村は農学士である自分がどうして、しかも「汚れ仕事」をしなければならないのか、ずいぶん悩んだようである。また、このなかで逆に、慢心を静めることができ、短気を抑え、自らを高めることができたと言う。障害児教育と自分。日本、そしてキリスト教。いかにあるべきか。彼は悩んだ。

ひとつはペンシルヴァニア大学医学部、もう一つはアマスト大学。どちらに進むべきか。彼は後者、札幌時代からの発展として生物学と地質学との事実による聖書の勉強を続けることにするのであった。「聖書は、人と、天然と、聖書自体との三位一体を具現しているように思います。」「宇宙の自然史と人間の精神史とを研究することによって、世界の進歩の跡をさぐることができるし、また我々の社会の未来を少し覗くことができると考えます」(一八八五・八・一〇：内村、新島宛書簡)。

(北海道教育大学助教授)

A)　E.セガンが関係した知能障害児学校　(＊ 数字は設立年)

1848: マサチュセッツ校(公)、ボストン、マサチュセッツ州
1848: バーレ校(私)、バーレ、マサチュセッツ州
1851: ニューヨーク校(公)、シラキュース、ニューヨーク州
1853: ペンシルバニア校(公)、アーウイン、ペンシルバニア州
1858: コンネチカット校(公)、レイクビル、コネチカット州
1868: ランドール校　(公)、ランドール島、ニューヨーク州

B)　内村鑑三、初期略年譜

1861：江戸小石川で生まれる(父、高崎藩江戸詰め藩士)。
1877：札幌農学校入学　、1887：受洗。
1881：同校卒業、開拓使御用掛。1882-1884：「千歳川鮭魚減少原因」、「漁業と気象の関係」、「鱈魚人工孵化法」等、論文
1883：御用掛辞職。1884：結婚、破婚、渡米。
1885.1-7：ペンシルバニア州立知能障害児施設指導員となる。
1885.9：アマスト大学編入、1887.7：同校卒業。
1888：帰国、新潟北越学館、仮教頭として赴任。

C)　「ここでは非常にうまくいっている。僕の任務は一晩おきに夜勤をすることと、最も知能の低い白痴児童に、一日三時間、歩き方、ハシゴの昇り方、ダンベル(亜鈴)の使い方を教えることである。これは彼らにとっては、非常に楽しい時間である。いつか君に来てもらいたい。」(1885.1.19：内村鑑三から新渡戸稲造宛書簡)